

中央大学父母連絡会

Kusa no Midori

巻頭特集

FOCUS！文学部

草のみどり

7

2020 July
Vol.320

2020年7月



Chuo University Parents Liaison Association



Be Ahead of the World

世界を動かす
人になろう

vol.02

英語で学び、英語で実践！

2019年、私は国際経営学部国際経営学科の1期生として入学しました。当初は、英語での講義が全体の7割を占めていることが楽しみである反面、不安な気持ちもありました。しかし、手厚いサポートのおかげでその不安はすぐに解消しました。「アカデミックサポートセンター（学修支援センター）」には教員が常駐し、英語に関する疑問点はもちろん、講義の質問や理解できなかった箇所などを親身になってサポートしてくださいます。

国際経営学部の大きな特徴は、1年次の夏季休暇に「Global Studies I（短期留学）」が必修であることです。私はアメリカ合衆国カリフォルニア州に約1カ月間ホームステイしました。平



留学先でプレゼンテーションしている様子



国際経営学部のエントランスにて

肌で感じたアメリカ人の素顔

私は『Which do you like prefer: electronic books or paper books?』

（電子書籍と紙の本ではどちらを好みますか？）をテーマに設定し、大学のキャンパス内やデビイスのダウンタウンへ足を運び、現地の人々へインタビューをしました。緊張してなかなか声をかけられず困っていたとき、町の人が

「Can I help you?」と話しかけてくださいました。この一言は私にとってありがたく、同時に勇気が出るきっかけになりました。会話では、相手が私の英語の発音が良くないために聞き取ることができず、かなり困難が伴いました。

そのような事態を想定していなかったので困惑しましたが、その場で書面の文章を見せることで乗り切ることができました。彼らは嫌な素振りを見せることなく最後までインタビューに回答してくださり、アメリカ人は親しみや

実用的な英語での
実りある学びや経験いわさき かいと
岩崎海都国際経営学部国際経営学科2年
私立中央大学附属横浜高校（神奈川県）出身

すく優しいことを肌で実感しました。

私の質問に対し、逆に相手から「What is your opinion?（あなたの意見は?）」と聞き返されるなど、日本人とは違った反応があり、アメリカ人は受け身だけの会話になることを好まず、自分と他者の意見を聞いたうえで改めて考える傾向にあると思いました。最終的にインタビューを分析した結果、若い年代ほど電子書籍をよく使用し、年配の方は紙の本を好むことがわかりました。

現地で得たさまざまな気づき

また、留学中に私は教科書に記載されている内容が必ずしも正しいとは限らないことを知り、大変驚きました。具体的には教科書や参考書に記載されている英語のフレーズです。日本で

は相手の話が聞き取れなかった場合、「Pardon?」を使うべきだと習いました。しかし、アメリカではこの聞き返しを使う人が少なかつたのです。実際は「What was that?」などのカジュアルな言い回しが圧倒的に多く使われていました。気になった私は現地の大学教員にその理由を尋ねました。すると「『Pardon?』は教授や年配者のような目上の方に使う丁寧語で、かしこまったニュアンスを含んでいます。また、このフレーズは年配の方がよく使います」と説明されました。この事実は日本に在る限り気づくことができませんでした。留学して人々と交流したからこそ発見できたのです。

さらに高まった学びへの意欲

私は、このような身近な疑問から学



留学先でインタビューを行った
ファーマーズマーケット

From the Faculty of Global Management



国際経営学部
だより



厳しい環境で自分を 創る

国際経営学部准教授
木村 剛

国際経営学部に入ってくる学生の多くは、将来、世界の舞台で活躍したいと考えていると思います。私は現在、エグゼクティブサーチの専門家と協力して、グローバルビジネスにおけるリーダーの方々がどのような経験をしてきたのかをインタビュー調査しています。今後、帰納的に共通項を導き出しますが、皆さん、自分をコンフォートゾーンから引きずり出して、新しい環境でチャレンジし、困難を乗り越えた経験をされています。また、「好奇心」や「反発心」をベースにした何か強い「原動力」につき動かされていることも共通しています。

私は、スノーボードのオリン

ピックメダリスト・竹内智香選手のメンターをしています。彼女は自分で交渉し、単身でスイスチームの練習に参加しました。竹内さんは、スノーボードを始める前からオリンピックに出場するという目標を決めていて、自らが成長できる環境に自分を追い込み、言葉や文化の壁を乗り越えて選手として飛躍したのです。これは、私の研究対象であるグローバルリーダーたちと類似する経験といえます。私自身を振り返ってみても、防衛大学校やアメリカのMBAという特異な環境で学び、その後、グローバルビジネスの世界に入りましたが、やはり「経験によって現在の自分が創られている」と実感します。

本学は「行動する知性」を掲げていますが、やはり好奇心を持って行動し続けることが人を成長させると思います。私も常にこの精神を忘れずにいたいと思っており、この春、私の学外業務（企業研修などの社会人教育）を株式会社化しました。このプロセスからも私自身多くのことを学びました。今後は「研究」や「教育」との相乗効果をめざすとともに、この経験からの実践知を学生に還元したいと思っています。

びは深まっていくのだと思っています。今回の体験から私の知っている世界は狭く小さいものであると改めて気づかされ、同時に知らない世界を自分の目で見てみたいと強く感じるようになりました。また、日々の授業のおかげで、国際的な経済ニュースに対する理解が深まり、特に国際法を学びたい気持ちが強くなりました。ヒト、モノ、カネ、情報が行き交うグローバル化した現代で、国の枠組みを超えての法律

は重要なものになっています。私は、ビジネスを学んでいくうえで多角的な見方ができる人間になりたいと思っています。これは国際経営学部の理念である「グローバルビジネスリーダーの育成」に深く関わっています。また、自分の意識の変化についても、学部の学びがもたらした影響であると実感しています。上級生がいらないからこそ、常識や慣習にとらわれず、私たち国際経営学部1期生はどのような人材にもな

れる無限の可能性を秘めているのだと思います。この学部に入学できたことを誇りに思い、これからは学問に精進していきたいです。
最後になりましたが、日ごろから温かく見守ってくれている家族をはじめ、このような貴重な留学経験や学びの場を提供してくださる国際経営学部の先生方や職員の方、関係者の方々に心より感謝申し上げます。